

十返舎一九 著

『続膝栗毛 十編』(上州草津温泉道中)

～温泉史料としての文学作品～

展示期間 令和7年7月1日(火)～8月31日(日)

『続膝栗毛十編 下』(上州草津温泉道中)

(文政3年：1820)

『東海道中膝栗毛』(初刷り：享和2年(1802)～文化11年(1814))で名をあげた十返舎一九(明和2年(1765)～天保2年(1831))が前作と同様に、弥次郎兵衛、喜多八の珍道中の続編として刊行した滑稽本です。「膝栗毛」とは、自分の膝を栗毛の馬の代わりに使う徒歩での旅行という意味です。

『膝栗毛』のシリーズは、文学的な価値が高いことは言うまでもなく、十返舎一九本人の調査旅行に基づいた記述内容や豊富な挿絵から、江戸時代の旅行や観光地の実態を記録した史料としても高く評価されています。

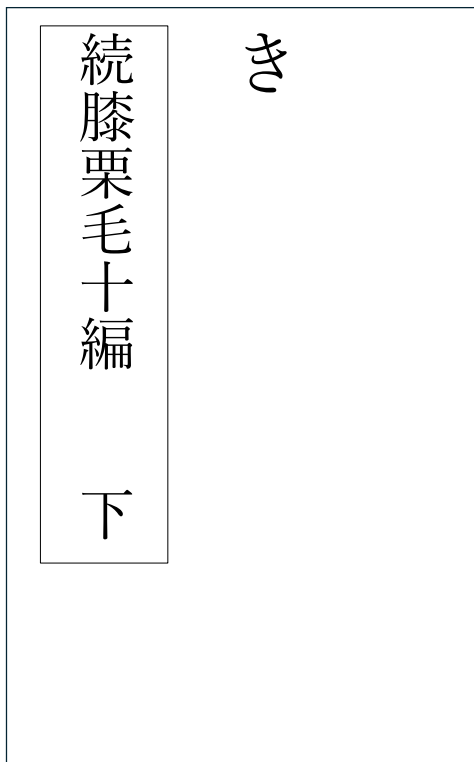
展示部分からは、江戸時代の草津温泉における湯治のシステムの一端を窺い知ることができます。また、挿絵とそこに添えられた狂歌には、賑わう湯治宿の様子や、強酸泉の独特な臭気がリアルに表現されています。

江戸時代後期には、寺社参詣などにとまなう江戸から地方への旅行文化が爛熟期に入ります。そのような時代背景の中で、旅行記や旅をテーマにした戯作が数多く出版され、これらの出版物は旅行ガイドとしての役割も果たしました。

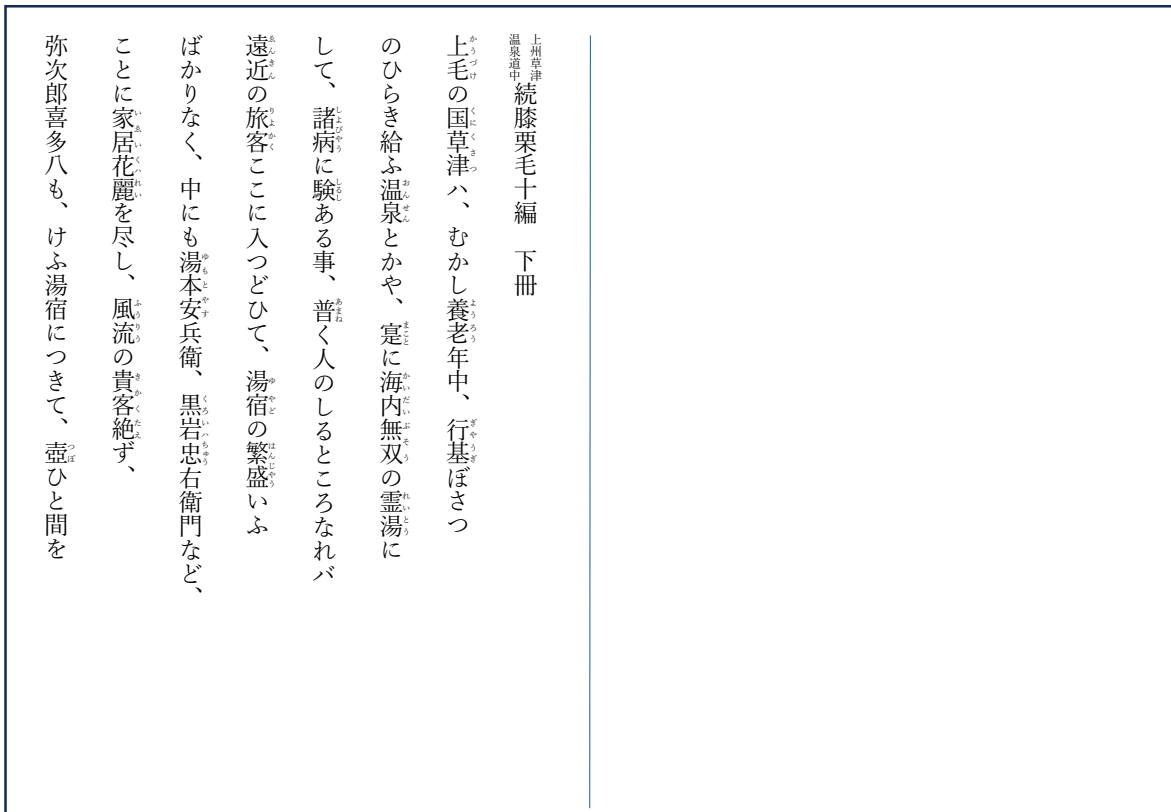
土屋喜英家文書 P1103 No.405

(原寸：縦 18 cm×横 12 cm)

表紙



見開き①



見開き②

すかし 尻の	くさつの 宿の	繁昌 は	鼻 を	つまむも	しれぬ	人 込	門人 一返舎 十九
-----------	------------	---------	--------	------	-----	--------	-----------------

見開き③

借きり、休足しいたるところへ、宿の番頭来りて、 ばんとう「さぞおくだびれでござりませう、かやうに通ひ帳に つけて上ますから、お入用の品は何なりとも、仰つけら れませう、トかよひてうに、さらしの糸つちふんどしと、ひしやくとをもつ て来り、おいてゆく、ふたりハこゝにしばらく入湯のつもり にて、このざしきをかりきり、こゝにてにたきをするゆへ 北八「なんだ、是ハふん どしだな、これをして湯へはいると見へた、御町 噂なことの 弥次「そしてめつそふに、伊勢参が湯治にき たとおもつたら、ミな此柄杓をもつて、いくのだそふな	ト此内男ども、ぜんわんなべやくはん、すりばちその外、まきあぶら いつさい、しよたいまハりのものをほこび、水もくミいれてゆくと 北八「サアく これから、飯を焚にやアならねへ 弥次「おれがミそを すつてやろう、てめへ米をとげ 北八「よし、承知だ ト米かし桶へ米をいれ、水を 弥次「コリヤ無性をやるな、手でとが いれ、しやくしにてかきまハす ねへか 北八「ナニめんどうな、かうしてながしさへすれバいい 弥次「そんならおれも、ミそをするハ面倒だ、すぐにかき たて汁にしておこふ 北八「コリヤ鍋で、めしをたくのだな 弥次「ヤイクそんなに水を入れたら、粥になるだろう 北八「ホンニ
---	---

〒371-0801 群馬県前橋市文京町 3-27-26

TEL:027-221-2346 Fax:027-221-1628

E-mail : monjyo@pref.gunma.lg.jp



もんじょかん
群馬県立文書館